
吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

【Nコード】

N2973Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

皆様、久しぶりにバカテス・ジャンルに復活する暮灘ですm（
し m

本当なら【バカと努力っ娘と四角形】が連載再開出来ればいいんですが、ちよつとそれも不可能な状況…

ですが、ある切っ掛けでバカテス・キャラを書きたいという情熱と、
【クロスネタって面白え〜♪】って思いが出て参りまして、

「いつか書きたい【連載準備的な試供作品】を色々書いて行きたいなあ…」

と思い、勝手ながら今回の企画を立ち上げました。

基本的にはタイトル通りに、

【バカテスの主人公の明久を、色々な作品に組み込み、色々なヒロインと絡ませてみる】

という単純なコンセプトです。

特に制限は無く、本当に試供作品やパイロット版ばかりになると思いますが、読者の皆様にご意見ご感想等を頂ければ嬉しく思うと同時に、今後の連載作品の参考にさせていただきますm（　　）m

現在の作品

明久↓禁書目録の世界…3作品

明久↓緋弾のアリア世界…4作品

皆様、こんばんわー☆

本当に唐突なバカテス・ジャンル復活に恐縮してる暮灘です。

今回お届けする作品は、サブタイ通りに

【明久↓禁書目録世界】

というネタで、

明久

世話好き&料理好き

特殊能力↓有り

能力性質↓非能力&非魔術（現時点では分類不可能）

という設定が基本となります。

また、”受け皿”となる禁書目録世界Ⅱ【学園都市】も、原作より
様々な改変が行われています事をご了承くださいm（ ）m

一応、1話完結が原作ですが、この【明久↓禁書目録世界】シリーズは、ダイジェストっぽい書き方になってしまっていますが、現時点で【禁書目録編（原作1巻）】まではプロットが存在します。

こんなコンセプトの作品ですが、お楽しみいただければ幸いです（
o ^ _ ^) b ☆

ねえ、みんな…

【学園都市】って知ってるよね？

ぶっちゃけ、僕が住んでる街ことなんだけどね♪

じゃあ、この街が出来た由来や経緯はどう？

へえ…みんなが知ってる【学園都市】ってかなり物騒なんだね？
えっ？

”お前の世界”は違うのかって？

うん。大分、違う…と思う。

そもそも、僕の住んでる【学園都市】が設立された目的は、

《最先端の科学と古代からの英知である魔法の積極的な融合を研究
すること》

なんだ。

そして、僕が生まれる何年前…【学園都市】は、その”最初の存
在意義”ファースト・レゾンデートルを示す事に成功した。

”シェリー・クロムウェル”

”エリス・マツカートニー”

多分、【学園都市】でこの二人の名前を知らない人はいない。

僕が生まれる何年前になるから：20年くらい前かな？

【学園都市】で行われた実験で、シェリーさんは【始めて超能力を使った魔術師】になったし、エリスさんは【始めて魔術を使った能力者】になったんだ。

ある意味、それまで良くて色物、悪くて異端扱いだった学園都市の真価が世間に認知され始めたのは、それからだったのかもしれないね？

えっ？ 二人とも生きてるのかって？

：どうして、そんな質問するのか分からないけど、今も二人とも学園都市で【魔法と能力の近似性と相違】って感じの研究を、二人揃って大学教授になった今でも続けてるよ？

僕もシェリー先生やエリス先生主催のセミナーや講演会によくいき、しっかり大学のオープン・キャンパスのゼミに登録してるしねっ♪

なんでって？

うーん：細かく言うのと長くなるから、簡単にはしよるけど、僕の「
両腕に宿る”力”」：

【ゼロ・スコア 零点回帰】

って言うんだけど、この力がまだ能力なのか魔術的な何かなのかハ
ッキリしないんだよ。

こういうケースってごく希あるらしくて、隣の部屋に歳上の彼女と
一緒に住んでる当麻：彼女とラヴラヴ同棲中の上条当麻の右手に宿
る【幻想殺し（イマジン・ブレイカー）】も似たような区分らしい
からなあ。

（僕のゼロ・スコアと当麻のイマジン・ブレイカーって性質も似て
るよね…）

ただ、専門家に言わせると似ていて非なる物：結果が似てるだけで、
原理は全く別らしい。

（当麻は文字通りブレイカーに近い性質で、僕はキャンセラーに近
い性質か…）

まあ、それはそのうち詳しくね？

某年7月20日

全ての始まりの日…

act 1

” 腹ペコシスターがやって来た!! ”

僕は今のところ魔術でも能力でもない【力】を除けば、かなり普通な人間だと思う。

ああ、そう言えば自己紹介がまだだったっけ？

僕は【吉井明久】。

とある高校に通う一年生だよ♪

能力は前に書いたけど、未分類の【ゼロ・スコア零点回帰】。
レベルは、当然のように「Unknown」。

そりゃあ、魔術でもない能力にも該当しない力で、”物差し”が作れない以上、レベルが不明なのはしょうがないよね？

友達が変わり者が多いし、魔術でも能力でもない力のせいで色々な所から呼び出されるけど、でもそれ以外は特に幸福でも不幸でもない…と思う。

だから、”不測の事態”ってあんまり慣れていないんだよ。

だから、ある晴れた休日、お布団を干そうとベランダに出たら、何故かもう布団が干されてて、その布団をよく見たら…何となくウェッジウッドとかの白磁の”ティーカップに似た印象”の真っ白の修道服着たちみっこいシスターさんで、なおかつ…

「お腹へった…」

なんて、ベランダに引っ掛かってる白くてちみっこいシスターさんに呟かれる経験に遭遇するのは初めてでありましたとさ…（汗）

「お腹減ったって言うてるんだよ？」

何故か疑問形のその可愛らしいシスターさんに僕は、

「それは僕に何か喰わせろと要求してるって解釈していいのかな？」

「うん♪ 理解が早くて助かるよ♪」

∴
∴
∴
∴

∴まあ、いつか。

「手っ取り早く食べれる物と、美味しく食べれる物、どっちがいい？」

するとちみつこいシスターは、本当に満面の笑顔で、

「手っ取り早く食べて美味しい物がいい!!」

寧ろ清々しくなるくらいキツパリと言い切りましたとさ。

「うーん∴なるべくリクエストには答えられるように努力はするよ。でも、その前に∴」

僕はシスターさんの両方の脇の下に手を入れて∴

” ふわっ ”

(うわあ∴軽い)

「にやにやにや!?!」

僕に抱き上げられたせいなのか、シスターさんは顔を真っ赤にして

猫みたいな声を上げるけど、

「ベランダにぶら下がったまんまじゃ、ご飯は食べられないでしょ？
可愛いシスターさん♪」

「はう…」

あれ？ 何だか大人しくなっちゃったよ。

act 2

”禁書目録にDedicator…ねえ”

「シスターさん、炒飯と焼きそばどっちがいい？ って言うか炒飯と焼きそばってわかる？」

すると借りてきた猫みたいにチョココンと座るちみっこいシスターさんは、

「どっちもわかるよ♪ それに両方！」

「炭水化物と炭水化物の夢のコラボレーションになっちゃうけど？」

「そのコラボ、むしろ上等なんだよ♪ えっと、それと私の事は【インデックス】って呼んで欲しいんだよ」

（「インデックス」…コードネームかな？）

僕は中華鍋にゴマ油を流して、溶き卵を入れながら…

「それって、索引ちゃんとか、見出しちゃんって意味かな？」

「ううん。【禁書目録】って意味なんだけど…あつ、魔法名は【Dedicatus545】、”献身的な子羊は強者の知識を守る”って意味だね♪」

えっ？

それって…

「【禁書目録】って、もしかして【Index Librorum Prohibitorum】のこと？ 1564年にローマ十字正教の教皇によって制定されて、1966年に廃止されるまで存在していたっていう【反十字教書物のブラックリスト】って感じの…」

するとシスター、”インデックス”は少し驚いた顔で、

「君、随分詳しいんだねえ…」

僕は”自分の力の根源”が知りたくて、能力関係と一緒に魔術関係の本とか読み漁ってるから、歴史とかラテン語とかその流れで詳しくなったんだよ。

まあ、そっちに時間を取られてるせいで普通の勉強はからっきし、まさに【バカまっしぐら】だけどね（笑）

それはともかく、

「それで、”Dedictus”って…僕のラテン語知識が確かなら、【神に完全に捧げる事を宣言する】って意味になるんじゃないかな？」

「君、ラテン語までわかるの？ 若く見えるけど、君は学者さんとかかな？」

「ラテン語は、かじった程度だけどね。あつ、僕は明久。吉井明久。学者どころか、どちらかと言えばデキの悪い方の学生だよ」

シェリー先生やエリス先生に言わせれば、魔法や魔術を理解するには、過去へ過去へ遡り、それが成立した経緯まで理解しないと本当には理解できない…らしいから、僕もそうしてるって訳。

シェリー先生に言わせれば、

『科学は未来へ未来へ進む学問だけどね、魔法や魔術は時間の積み重ねで成立する。時間のベクトルが真逆なんだよ』

って事らしい。

まあ、そういうシェリー先生も、ルーンの解析にコンピュータ使ったり、ゴーレム錬成の術式を刻むのにチョークだけじゃなくてハンディ・レーザー使ったりするけどね☆

「アキヒサ…アキヒサだね♪」

なんか嬉しそうなインデックスだけど、

「ところで、インデックス…一つ聞いていい？」

「うん♪ アキヒサは命の恩人だもん！ わたしに答えられる事なら、なんだって答えるよ？」

「じゃあ…」魔法名”を名乗ったって事は、ご飯を作らせた後、僕をサクッって殺っちゃうつもりなのかな？ って…」

僕の言葉に、インデックスはいかにも心外って顔で、

「そんなことしないもんっ!!」

act-3

”友達がコーヒー豆と一緒にやって来た”

「アキヒサ、天才なんだよっ！！ スツゴくスツゴく美味しいんだ
よっ！！ ここまで美味しいと、きっとお腹好いて無くても美味し
いって思うんだよっ！！」

「そ、そっかな？　そこまで喜んで貰えると、照れ臭いけど嬉しい
よ」

あゝもう、口の回りソースだらけじゃん。

「喋りながら食べるから：インデックス、こっち向いて」

僕はティッシュを手にとってインデックスの口の回りを拭いてみる。

「はい。これでよしっ」と

するとインデックスは、ちょっぴり頬を赤くして、

「ねえ：アキヒサってもしかして、凄く”世話好きな人”：なのか
な？」

「かもね。周囲に何かとほっとけない人が多かったし、今も多いから」

インデックスの皿上の残量が少ない事を確認した僕が立ち上がろうとした時だ。

” あつきひさクウウウーーン ”

「な、何っ！？ 今の不気味な声っ！？」

「ああ、友達が来たみたい。うーん、今のは【音を媒介する空気振動】を”ベクトル操作”した音なんだ。簡単に言えば、指向性スピーカーみたいなものだよ」

チンプンカンプンな顔をするインデックスに、僕は「ちょっと待ってて」と言い残し、席を立てて玄関に向かう。

そして、ガチャとドアを開けると、立っていた無造作に切り揃えた長めの白髪頭で、ヒョロっとした印象の”友達”に、

「やっほ、”いっぽー”。今日はどうしたの？」

「コーヒー煎れてくれ」

と、” いっぱー”：通称【アクセラレーター一方通行】は、玄関に入るなり、僕にビニール袋に入った紙袋を手渡す。
開けて見ると、

「コーヒー豆？ 店で挽いてもらわなかったの？」

「店で挽かせたら、持ってくンまでに薫りが飛ぶだロオ。それに明久が挽いた方が美味エンだよ」

いっぱいのコーヒーへの拘りは半端じゃないからなあ。

「ん、わかったよ♪ なら、いっぱいの期待に応えないとね。あつ、いつまでも玄関に居ないで上がりなよ？ あつ、お客さん来てるけど、同席でいい？」

いっぱいこわおもて：強面だけど、意外と人見知りだからなあ。
一応、断っておかないと。

「客だア？ 俺の知ってる奴かア？」

僕は首を左右に振り、

「多分、誰も知らないと思う。多分、英国清教系のちみっこいシスターで、ベランダに引っ掛かった」

「アアン？」

いっぽーは思い切り怪訝な顔をするけど、事実だしなあ：

僕といっぽーは家に入りながら、

「あれ？　そういえば、”あいちゃん”に”うみちゃん”は？　一緒じゃないの？」

「ああ。最愛と海鳥は”バイト”だ」

「バイト？　ああ、【アイテム】かあ。沈利さんのところなら、まあ大丈夫かな？　最近は危ない橋を渡ってないって噂だし」

沈利さんって言うのは、フルネームを【むぎの・しずり麦野沈利】さんって言って、特殊能力者部隊【アイテム】のリーダーさん。

熊もびっくりなぐらい鮭料理が大好きで、最近はゴッツい彼氏ができたらしいって噂があるんだよね♪

アイテムには僕の友達も所属してるから：

（この間、差し入れに鮭弁を作って持っていったら、大喜びされたっけ☆）

…危うく【アイテム専属料理人】にされかけたけど（汗）

「ンで、妹どもと合流するまでの時間潰しに来たんだがヨォ…タイ

ミング悪かったか？」

「ううん。いっぽーならいつでも大歓迎だよ♪」

「∴明久のそばにやたら人が集まるワケ、解る気がするぜ∴」

いっぽーは何か呟いたけど、音声を拡散させたのかよく聞こえ無かった。

皆様、ご愛読ありがとうございました m (m

何というか：すみません！ (m
勢い任せでやっちゃいましたっ！！

脳内動画が止まりませんでした (^ | ^ ;)

なんせ、頭の中のインデックスが、まるで中の人が乗り移ったように出たい出たいうるさくて (笑)

そして、アイデアを纏めてたら、いつの間にか作品が完成してた罫 (^ | ^ ;)

今回は、取り敢えずの試供作品という事でしたが、皆様いかがだったでしょうか？

面白い面白くないでも構いませんので、ご意見ご感想を頂ければ幸いです m (m

皆様、こんにちわー☆

いつも心象風景は魔女っぽい暮灘です（^^；

なんと、勢い任せて書いてしまいました【バカ目録】クロスの第2話（^^；

というか、インデックスは可愛いし、明久&一方通行の友情シーンが好きすぎて、書かないのが辛い（笑）

今回のエピソードでは、一方通行と明久の過去や丸くなった根本的な理由、そして【この世界の学園都市】と魔法と科学の概要が、かなり明かされます。

この、【バカ目録】クロス・シリーズの一方通行は、（作者的にはいい意味で）とても【らしくない】です。

何故、彼が絹旗最愛や黑夜海鳥を救い養うような”丸い人間”：【口は荒いけど、基本的に腕っぷしの強い善人】になったのか？

という理由が、何となくでも皆様に伝わればなあと（^^；

明久との友情の根本と、ラストのインデックスに贈った言葉…

これが、【この世界の一方通行の本質】だと暮灘は考えてます☆

こんなエピソードですが、皆様が楽しんで頂ければ幸いです（o^
ー´）b☆

とある学生寮として使われてるマンション

明久の家、キッチン

「ねえ、いっぱー…」

何かいいお茶菓子ないかな？という感じで台所を漁っていた明久の問いかけに、

「アアン？」

「インデックスと一緒にリビングで待ってたら？」

するといっぱーこと、アクセラレーター一方通行は苦虫を噛み潰したような顔で、

「明久クウウン：この俺にあの時代錯誤臭いミニサイズのシスターと、何話せてんだア？」

「英国十字清教の歴史概論とかは？　ローマ十字正教からの政治的独立を画策した【宗教改革という名前の独立戦争】のくだりとか面白いよ？　後のアメリカ独立戦争の時の近似点とかね」

「興味ねエ…それよりも俺は煎れたての一切薫りが飛んでねエ、香ばしいコーヒーが飲みてエンだよ」

明久は苦笑しながら、

「はいはい。もうすぐ抽出し終わるから、もうすぐ待ってね♪」

「オウ…」

と、何気に横目でコーヒー・サイフォンをガン見してる、わりと子供っぽい一方通行であつた。

「お茶受けは、買い置きのクッキーしか無いけど良い？」

二人分の紅茶とクッキーを入れた菓子皿を持ってリビングに戻ってきた明久がそう言うのと、

「うんっ！ アキヒサ、何から何までありがとうなんだよ♪」

「別にいいよ。客人をもてなすのは、古式豊かしい日本の風習と美徳だし」

「だが、オメエは度が過ぎンぜ？ 一歩間違うと、襲撃してきたスキルアウトまで茶と菓子出して持て成しそうだからなア」

と、呆れるような表情でリビングへ入って来るのは、すっかり本日二杯目の”明久コーヒー（笑）”を、なみなみと大きめのマグカップ（明久の家に置きっぱなしの私物）に注いでキープしてる一方通行だった。

「それでもいいじゃない？ お茶とお菓子で殺し合いが話し合いに変わるなら、僕は喜んでいくらでも用意するよ♪」

しかし、一方通行は面白くなさそうに、

「ケッ！ 明久、オメエは連中は甘過ぎるぜ？ 情けてンのは、常に正しい結果になるとは限らねェんだぞ」

「わかってるよ。見逃したが為に、逃した相手に後ろから頭を撃ち抜かれる事もある…それが、【学園都市】の宿命だからね…でも、」

明久は小さく笑い、

「いっぽー、心配ありがとう♪」

「チッ…」

「でも、これも性分だからね」

少しだけ、【この世界の学園都市】を補足させて欲しい。

”とある平行世界”では、

【スキルアウトⅡレベル0】

が常識だったが、この世界の学園都市は、そうとも限らない。

前にも触れたが、学園都市の存在意義は、

【最先端科学と伝統ある魔術の有機的融合】

それを看板に掲げてる街が、”能力者じゃない”という理由で、人を放り出す訳は無かった。

レベル0はあくまで【能力者基準】の話で、今の学園都市の技術なら、本格的な能力開発（脳の外科的処置による構造変更）の前に、

いくらでも判定ができる。

魔術師の素質というのは能力者よりかなりアナログ的で、資質があるかどうかは本当に修行をやってみないとわからない部分がある。

そして現実レベル0と判定された人間が、後に魔術師として大成したというケースは、プロパガンダではなく学園都市には純然たる【事実】として山積している。

考えてもみて欲しいのだが、原作と呼ばれる”とある平行世界の彼女”に言わせれば：

『魔術っていうのはね、才能の無い人間（無能力者）が、それでも才能のある人間（能力者）と同じ事がしたいからって編み出された物なんだよ』

であるならば、【無能力者】とは判定された人間が無能と呼ばれたくないが為に魔術にすぎるのは、当然の帰結であった。

更に学園都市では【最初の超能力を使った魔術師】であるシェリー・クロムウェルや、【最初の魔術を使った能力者】であるエリス・マツカートニーの成功を受け、コンピュータを中核に据えた最新機材を積極的かつ大量に導入し、更に多角的&高速に大量の情報を元に魔術を解析し、数多くの成果を上げていた。

でも、皆様は不思議に思わないだろうか？

とある平行世界において能力者と魔術師が互いの力を使えない理由は、脳の構造的な違いをあげ、

【直流回路に交流の電気を流す、あるいは交流の回路に直流の電気を流すような物】

と表現されていたが、この意味は…

【電気（異能の力）と言う本質は同じだが、交流と直流のように能力と魔術には性質の違いがあり、それぞれに対応した（脳内）回路でないと焼き切れてしまう】

という比喻だ。

しかし、我々は日常的に変換回路を用いて交流と直流を切り替えて使っている。

ならば…

学園都市の一番偉い人

『ならば、我々も魔術と能力の間の脳内信号処理を切り換える…そのような交換器を開発すれば良いだけの話だ』

必要悪の教会の偉い人

『グッドアイデアにありにけりですことよ♪』

と、このような話し合いが持たれ、シェリーとエリスの成功を持つ

て結果となした。

このような経緯から今や学園都市は、能力者だけでなく、

【世界で一番魔術の研究を大っぴらにやり、また強さを考慮しなければ世界有数の魔術師が多く住んでる街】

という側面も持つ。

【学園都市】は、名前負けしないよう研究と教育には熱心な街で、魔術の研究と教育、魔術師の育成もまた例外ではない。

科学サイドから無能力者（レベル0）と判定された人間の受け皿と
かる【魔術】。

では、そこから落ちぶれた人間の行き先は？

実は、社会的セフティ・ネットは学園都市にはもう一枚存在する。

それ即ち【信仰】：平たく言えば、【英国十字清教】だ。

建前的には、魔術関連の技術やパテントは全て英国十字清教…実質

的には必要悪の教会が掌握&管理していて、そうであるが故、形の上だけでも主流の英国式近代魔術師を志す者は、十字清教に改宗ないし入信しなければならない。

そして、魔術師になりきれなかった者の中には、信仰に救済を見出す者も多く、その中から聖職者を目指す者も数多くいる。

実を言えば学園都市というのは、極東で英国十字清教徒がもつとも密集してる街で、同時に英国十字清教のアジア最大の拠点でもあった。

これが後に英国十字清教保守派：魔法と科学の融合に反対する一派（彼らの妨害が懸念された事が、シェリーやエリスの実験が学園都市で行われた理由の一つ）が、迂濶に学園都市を攻撃できない理由であり、同時に後々ローマ十字正教が執拗に狙ってくる理由の一つでもあるのだが：

とにかく…能力、魔術、信仰という受け皿を越えてなお【無法者】スキルアウトとなる者がどれ程いるのか？という事だ。

例えば…であるが、もし仮に能力者の一部が【無能力者狩り】等という愚かなゲームを始めれば、被害者はまず十字清教系の施設に駆

け込むだろうし、さすれば魔術師が動く。

【この世界の学園都市】とは、そういう力学バランスで成り立っていた。

「ねえねえ、アキヒサ♪ そのプラチナ・ブロンドの人ってアキヒサのお友達？」

クッキーを頬張りながら、幸せそうな顔で聞くインデックスに明久は頷き、

「うん。そうだよインデックス。行方^{なめかた・いっぽう}一方。僕の幼馴染みで親友だよ」

すると一方通行は、少し視線を逸らし：

「よせよ…俺は、もう戸籍も無けりゃ、オマエの言う名前もどこにも残ってねェよ…過去の記憶も曖昧だ」

「でも、いっぽーはいっぽーだよ。例え、記憶が有ろうと無かろうと、ね？」

無垢に微笑む明久に、

「毎度思うんだがよオ…明久、なんでオメエはそう自信満々にあっさり言い切れるんだア？」

「だっていっぽー、再会した時、ちゃんと僕のこと憶えてたじゃない？」

「ありゃ…どっかで見たことあるツラだって思っただけだ」

明久はクスッと笑い。

「それで十分だよ♪ それって、ココでは忘れても…」

明久は自分のコメカミをトントンと人差し指で叩いた後、今度を自分の胸を親指で指して、

「ココではしっかり憶えてたって事でしょ？」

一方通行は、白髪をクシヤと掻き（一方通行の照れた時の仕草だ）、

「バカが…」

と、小さく呟いた。

「やっぱり、いっぽーはいっぽーだよ♪ 僕をバカって言う時の口調、昔とちつとも変わってないもん。昔からいっぽーには沢山バカって言われてたから、よく憶えてるよ♪」

「それはオメエがあんましお人好しで無茶で無鉄砲だからヨォ…ア
ン？」

一瞬…ほんの刹那の間、朧気な画像が脳裏を掠めた…

明久と再会してからたまに起こるようになった…理論的には有り得ない現象に、一方通行は慣れ初めてはいても軽い驚きを覚えた。

そして明久は優しく微笑み、もう一度…

「ほらね？ やっぱり、いっぽーはいっぽーだよ♪」

「いいなあ…」

そんな二人を見て、インデックスは心から羨ましそうに呟いた。

「記憶が無くなっても、そうやって大切に想ってくれる友達がいて…記憶を無くしても、大切に想いたい友達がいて…」

今にも泣きそうな顔で微笑むインデックスに、

「インデックス…その言い方ってもしかして、君も…？」

インデックスは小さく頷き、

「うん。私も一年より前の記憶が無いんだよ」

しかし、場が暖かい友情からシリアスな空気になろうとした時、

”キンコーン♪”

いきなり、タイミングを計ったようなチャイムの音。

「誰だろ？」

明久は良い意味で空気を読まず立ち上がった。
そして、インターフォンをとると、

『あつ、アキ、今大丈夫？』

モニター画面に映ったのは、茶髪をショートカットにし、ヘアピン

がワンポイントの中々可愛らしく、活発そうな少女だった。

「あっ、ミコちゃん♪」

明久はチラリと一方通行とインデックスを見る。

一方通行はさして興味も無さそうに「いーんじゃね？」って顔をしてるし、インデックスはコクコクと頷いていた。

「うん、オッケーだよ♪」

明久が玄関に向かっていくのを目で追ってから、一方通行は、

「なア、シスター…」

「なあに？」

「記憶なんざ無くても、わりと人間どうとでもなるし、生きてはいけンぜ」

「…うん」

「それでも足りねェンなら、新しく記憶すりゃいいだけだ。俺から言えンのは、それぐれェだ」

インデックスは意外そうな顔をしてから満面の微笑みで、

「ありがとうだよ♪ ” いっぱい”」

「チツ…」

（俺もヤキが回っちまっか…）

あるいは、

（それとも、明久のバカでも感染したか？）

何れにせよ…

「まア…悪イ気分じゃねエな」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm () m

今回は、明久と一方通行の友情と学園都市の本質に焦点を当ててみました。如何だったでしょうか？

もし、よろしければこのまま原作第1巻の【禁書目録編】を、このシリーズで書いてしまいたいのですが、どうでしょうか？（汗）

次回は、ラストに登場した【ミコちゃん】がかなり愉快的行動（笑）をとってくれる予定です（；^|^A

それでは、また皆様にお会いできる事を祈りつつm () m

皆様、こんばんわー☆

本日も時間がギリギリですが、何とか二本アップが間に合いそうでホッとしてる暮灘です（^^）；

さて、ちょっと急ぎ足ですが今回のエピソードは…

【御坂美琴ちゃんが名実共にメイン・ヒロイン】

の回です（o^ー^）b☆

【バカ禁書】世界における彼女の姿や、今の明久への想い、明久とのちよつと過去なんかを散りばめてみました（；^|^A

ぶっちゃけ、【可愛い美琴】を書きたいが為に作ったようなエピソードです（笑）

皆様に、暮灘の書く美琴が可愛いと思って貰えれば、嬉しいなっ♪

他にも、原作（小説）をご存知の方には【アイテムの中にいる明久の知り合い】が誰なのかかったり、あるいは【魔術が使える能力者&能力が使える魔術師】に対するちよつとしたエピソードも出てきます♪

あと、個人的に気に入ってるのは：

美琴の回想シーンに出てくる佐天と初春がいい味だしてます（o^
ー'） b☆

こんなエピソードですが、楽しんで頂ければ幸いです（o^
ー'） b☆

追伸

仮にですが：

この【バカ禁書】を連載にして欲しいという読者様はいらっしゃいますか？

また、連載するとしたらバカテス板or禁書板、どちらが適切でしょうか？

さて、明久が玄関を開けると立っていたのは：

茶色の髪を清潔感溢れるショートに纏め、違う学校の後輩に貰った花飾りのついたヘアピンがワンポイントを演出する、中々に可愛らしい少女だった。

「こんにちは、ミコちゃん♪ 今日はどうしたの？」

「あ、アキ！ あ、あの：これっ！」

顔を赤らめながら差し出したのは、さほど大きくない、でもお洒落なデザインの紙箱だった。

中から微かに甘い匂いのするそれは：

「あ、あのね！ さ、最近、日本じゃ【学舎の園】にしか出店していない海外の有名なスイーツ・ショップができたのっ！ と、友達と一緒に食べに行ったんだけど、思ったより美味しくて：その、アキにも食べさせてあげたいなって：」

「そっか♪」

明久は”スッ”と手を伸ばして、

「わざわざありがとうございます☆」

”サラサラ”

柔らかな髪を乱さないように、優しく優しく撫でた。

「ふにゃあ☆」

明久のどこか女の子を思わせる柔らかな笑顔と、暖かさが伝わってくる手の平の気持ち良さに、少女は腰から碎けてその場に座り込みそうになるけど…

（だ、ダメ！ 今崩れたら、ケーキがグシャツってなっちゃう！）

自らの”能力”を使い、生体電流を調整して筋肉に渴を入れて姿勢を維持、ケーキを死守したショートカットの少女は賞賛してもいい。

「あのさ…アキ、上がっていいかな？」

明久はニコリと微笑み、

「もっちらんだよ♪ お客さん来てるから、ミコちゃんが良ければだけど」

「”お客さん”…？」

”ぴくっ”

その途端に、少女の気配が変わる…
ただし、明久は気付いてないが（笑）

「是非とも上がらせて貰うわね？」

引き吊りを抑えて無理矢理の笑顔だから、何やら表情に変な凄みがあるが、明久は大して気にした様子もなく、

「うん。じゃあ、先にリビングに行っててくれる？　せっかくミコちゃんがケーキ持ってきてくれたし、お茶のお代わり持ってきてくから」

「よろしくネ♪」

ミコ（？）　side—

（今度は、どんな女が来てるのよ…！？）

既に来慣れた（↑ここ重要よ！）リビングに向かいながら、私はま

だ見ぬ”恋敵^{てき}”の事を考えていた。

（この間は、オカッパ頭のピンク・ジャージだったわね…）

そう、この間明久の部屋で鉢合わせたのは、下半身はジャージだったけど、上半身は半裸（というかブラ一枚で、そのブラすら外そうとしてたのっ！）、私より少し歳上な感じの、

（黒髪でオカッパ頭の女だったわね…アキは”リコちゃん”って呼んでたっけ…）

とにかく、そんなのと鉢合わせしたのよっ！

アキが女の子を性的な意味で食べ散らかすタイプじゃないのは、百も承知してるから…

（だったら、私がまだ処女とか有り得ないもん！　アキと一番親しい女の子って絶対に私だしっ！！）

あれ？

今、『そう思ってる女の子は一人じゃない』って声が聞こえたような気がするけど、気のせいよね？

と、ともかくアキに話を聞いたら、そのリコって女は能力を極限まで高めて使用する際、【残量能力中毒を起こす特殊な結晶】^{ゼロ・スコア}を服用しなくちゃいけないから、定期的にアキの【零点回帰】^{ゼロ・スコア}で、”浄解”する必要があるんだって。

アキの説明に一切の嘘の匂いや疑わしいところはなかった（当たり前よね？ アキなんだから♪）んだけど…

『ねえ…ブラ、外す必要あるの？』

アキがお茶を煎れに行った隙に、私が女の直感で訊ねてみると…

『あきひさが望むなら、わたしは貴女が見てる前でぱんつを脱いでも構わないけど？』

と、いけしゃあしゃあと言い切りやがったのよっ！！

その瞬間、私は確信したわよっ！！

（ああ、コイツは”恋敵”^{ライバル}だってねっ！！）

更に加えて…私の胸を見ながら、言うに事欠いて…

『勝った…コホン。そんなチツパイを、わたしは応援しなくもない』

ですってえっ！！

もし、アキがお茶を持ってくるのがあと少し遅ければ、私はあの時に、掴み合いのケンカになってたかもしれないわ…！！

（しかも帰り際にアイツうっっ！！）

『アンタの顔、覚えたから…』

『わたしもアナタの”AIM拡散力場”は記憶した』

（アレって、宣戦布告って受け取って良いわよねっ!?!?）

えっ？

ところで、お前は何者かって？

あっ、そういえばまだ自己紹介してなかったっけ？

私は”美琴”^{みこと}。”御坂美琴”^{みさか・みこと}。

よろしくね☆

一応、学園都市に7人しかいない【レベル5の能力者】って事にな
ってるわ。

二つ名は、”超電磁砲”^{レールガン}よ♪

（まあ、私としては【ちょびつとだけ魔術が使える”魔法少女”】
って方が気に入ってるけどね♪）

シェリー・クロムウェルやエリス・マツカートニーが先鞭を付けた
みたいに、今時の能力者は、魔術が使える者もいるのよ？

”魔法が使える能力者”、もしくは”能力が使える魔術師”…通称
【バイア（両力使い）】って呼ばれてるわね？

私も一応は、その【バイア】なのよ☆

あつ、人間の脳の処理能力は限度があるから、使える魔法はたった
一つだけだけどね。

まあ、簡単に言っちゃうと…
高レベル能力者って、脳が無意識に能力に演算を降っちゃうから、
そんなに大量に魔法は使えないの。

実際、【バイア】として最もバランスがいいのは、”レベル3ぐら
いの能力者”とされてるわ。

能力と魔術が両方ともそこそこ使えて…
模擬戦とかで戦ったりしても、能力と魔術が互いの欠点を補ったり
してて、人によってはかなり強いわよ？

話がズレちゃったわね？
でも、他に話す事って…

あっ！

一番大事な事を言うのを忘れてたっ！！

私こと御坂美琴は…（あれ？　どっかで聞いたことあるフレーズね？）

アキこと吉井明久に熱愛してるのですっ！！

ちょっ！？

なんでそこで全力全開でズッコケるのよっ！？

えっ？

平行世界のお前は、そんなんじゃないだろう？

私じゃない私の事なんて知った事じゃないわ。

好きな相手に素直になれなくて、ツンデレな態度をとってる？

冗談じゃないわよっ！

アキはタダでさえ鈍感^{バカ}な上に、素直で純粹で無垢で、とんでもなく優しく可愛いのよっ！！？

ツンデレなんかしょう物なら、一発で：

『僕は、ミコちゃんに嫌われちゃったのかな…？』

って思うに決まってるじゃない！

そんな風になったら、ここぞとばかりに横から何者かに掠め盗られるわよ、間違いなくねっ！！

（佐天さん、初春さん…私、頑張るからっ！）

私に好きな人がいることを知って、全面協力してくれる年下の友人二人の顔を、私は思い浮かべる。

『短パンは駄目ですよ。色気無すぎですし、蹴り技使う時にパンツ見られたくないから…なんてバレたら、普通にドン引きされます』

『でも、私…下着とか子供っぽいとか黒子に言われてるし…』

『それがいいんですよ！！ 普段は凛々しくてお姉様気質の御坂さんが、実は子供っぽい物が大好きって言うのは、男の人にとっては激しく萌え要素なんですっ！！』

『そ、そうなんだ…』

『そして、思いつきり！ 御坂さんが思い出すと赤面して恥ずかしさのあまり転げ回るくらい思いつきり甘えまくるんですっ！！』

『ほえっ!?!』

『可愛い物好きに子供っぽい下着、そして激しく甘えん坊…これにギャップ萌えしない男はいませんっ!!!』

『そ、そうなのかな…? でも、私…散々ケンカ売っちゃったし…そんな私が甘えても…それに私、本当に甘えん坊だし…』

『御坂さん御坂さん。きっと大丈夫です♪ 御坂さんの売ったケンを残らず買ってくれて、気の済むまで付き合ってくれるようなおバカな…バカみたい包容力がある男の子なら、きっとどんなに御坂さんが甘えても受け入れてくれる筈ですよ♪』

『初春さん…』

『これ、差し上げますね』

『これって…お花のついたヘアピン…?』

『わたしが昔使ってたお古ですが、きっと御坂さんの可愛さをアピールするのに役立ってくれる筈です☆』

『グスッ…二人ともありがとう…っ!!!』

『いいんですよ! 乙女にとって恋バナは重要な栄養素ですから♪』

『白井さんの事はお任せください。いざとなったらわたしの分まで山ほど仕事を回して、妨害しないように動きを封じますから☆』

『私、幸せだよお…グス…頼りになる友達が二人もいてくれて…ヒツク…』

『きっと上手いきますって！　こんなに可愛い人なんですから！』
『いつまでも泣いてたら、可愛い顔が台無しです☆　ほら、笑ってください♪』

（佐天さん、初春さん、大成功だよ♪）

アキは、いともアツサリと私を受け入れてくれた。

【案ずるより生むが易し】　って諺は、きつとこういう時の為にあるんじゃないかな？

（明久は、私に優しくしてくれる大事にしてくれる…）

明久の優しさを失ってなるものか…！！

私は、リビングのドアの前で深呼吸を一つ…

（どんな女が出てきても負けないんだからねっ！！）

そして：

私は気合い十分にドアを開けた！

まあ、これが私とインデックスの長い長い付き合いなの、最初の一步だったのよ。

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

深夜アップなので、どれ程の読者様が読んでくださるか心配な暮灘です（^^；

皆様、【バカ禁書】の美琴は如何だったでしょうか？

実は、美琴は明久を巡る【暫定トリプル・ヒロイン】の一人だったりします（笑）

もし、続きを書くとして果たしてここに何人入ってくるのやら…；

^ ^ A

ただ、名前は出てきてないですが、トリプル・ヒロインの一人であるピンク・ジャージの娘は、間違いなく浜面くんとくつつくより危険度低いです（o^ー'）b☆

なんせ明久はいざとなれば、鮭弁で麦野を懐柔できますし（笑）

正直、かなり話が固まってきた、そんな長くない連載ならこなせそうな【バカ禁書】ですが…作者、大いに迷ってます（^^；

いや、短期じゃない連載三本は、果たして読者様的にはどうなんだろうと…

さて、色々と悩ましい作品になりましたが、またお会いできる事を祈りつつ（

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It;パイロット版:E p i s o d e 0 0 & g t;

皆様、おはようございまーす☆

眠れない夜は♪ 取り敢えず小説書こう♪な暮灘です(^^;

なんと昨晚11時に続き、再び【明久色々ヒロイン】に再投稿♪

IBの【E p i s o d e 0 0】最終話を含めれば、一日二本更新だぞーい☆

いや、徹夜明けでテンション高いんです(^^;

しかも、今回はリクエストの多かった、

b ☆ 【明久↓緋弾のアリア世界(バカテス×アリア)】ネタ(〇^ー、)

いや、【バカ禁書】は美琴を出せてある程度満足してしまったのと、色々計画が:(汗)

あつ、そうそう!
タイトルは、

【バカとアリアと賞金稼ぎ】

です♪

今回はアリアの世界と明久達のマッチングを是非是非読者の皆様に聞いてみたかったので…

【浦賀沖海難事故】

を題材に、本編が始まる前のエピソード…

>パイロット版…Episode00<

を描いてみました(；^|^A

正直、アリアをちゃんと書いたのは初めてで、世界観とかちゃんと描けてるか激しく不安です(^.^；

そして、アリアは元々愉快だけど…

ラストにチラッと出てくるあの娘が何だか愉快的事に(汗)

自分だと完成度のイマイチわからぬ作品で、原作(小説)程度の銃の話は出てきますが…

皆様のご意見ご感想を頂ければ幸いですm(_____)m

某年、冬

武偵高校学生寮

1年強襲科【遠山キンジ】私室前

「おい…キンジ、いつまでもヒツキーしてないで出てきなって」

「キンちゃん！ もう何日もご飯食べてないよね？ お願いだから、ドアを開けてっ！」

”僕”は、となりの日本人らしい美しく長い黒髪に白いリボンを、世間一般的な基準なら明らかにナイスバディな美少女を横目で見ながら、

（僕はともかく、白雪の声にも反応しないなんて…）

「重症だね…」

僕より遥かに懸命な白雪を見ると、やっぱり何とかしてあげたくなる。

決して白雪と男と女の関係になることは無かったけど…

（というか、僕はもっと薄くてちっちゃくて平べったいのが好みだ

し…)

引っ込んでるところは引っ込んでいいけど、出るところは出てない…
凹凸が無ければ無いだけ、

(好きかな?)

とはいえ白雪とは約1年間、武偵高校の【超能力捜査研究科(S S R…S研)】で同じ釜の飯を食った友人。

(それにキンジとも散々遊んだしね…)

友情が無いと言えば嘘になる。

(しょうがないなあ…)

備品や設備を壊すのは気が引けるけど、

「少し荒療治が必要みたいだね?」

僕は、首の後ろ…正確にはシャツと制服の上着の間に手を突っ込み、

「白雪、下がってて」

背骨にそうように隠し持っていた、”ソレ”を引き抜いた。

「あ、アキちゃん! ショットガン(散弾銃)なんてどうするのっ
!?!」

そう、僕が引き抜いたのは、イタリア・ベネリ社の”軍用”ショットガン、【M3T】タクティカルというモデルのカスタムだ。

バレル（銃身）の下に平行にくつつくチューブ・マガジンの装弾数を8発↓7発に減らし、その分バレルとチューブ・マガジンを”ソウド・オフ（切り詰め）”し、また散弾銃では一般的なライフル・ストックではなくピストル・グリップにし、はなっからショルダー・ストックはオミットした：

簡単に言えば、遠距離での命中率や集弾性、弾数を犠牲にコンパクト化して、携行性と隠蔽性を最大限に引き上げ、近距離制圧銃撃戦に特化したカスタム・ショットガンだ。

他にも【ピカンティニー・レール（オプションを取り付けるアタッチメント）】をバレルの左右上面や銃本体上面に増設してるけどね。

「白雪、本来の警察機構のショットガンの正しい使い方って知ってる？」

「へっ？」

唐突な質問にキョトンとする白雪に、僕はニッコリ笑いながらドアノブに図太い銃口を向けて、

「人に向けて撃つんじゃないくて、部屋や家に鍵かけて籠城する犯人に対して突入する際、回りの木枠やドアノブごと鍵を吹き飛ばすのに使うんだよ。あるいは蝶番とかね♪」

” バガンッ!”

僕は躊躇なく引金を引く。

ショット・シエル（散弾カートリッジ）から解放された直径約9 m
mの鉄球×9発の直撃を受け、極めて日本的な強度で作られたドア
ノブ周辺は粉々に砕け散る。

ロック部分を失ったドアを、

” ガンッ!”

僕は遠慮なく蹴破った。

部屋に入る時、

” ガシャ”

M3Tのスライド（ポンプ）を操作して、空になったショット・シ
エルをイジェクト（排莖）すると同時に次弾をローディング（装填）
する。

M3シリーズは本来、ポンプ・アクション（今やった手動装填）以外にセミ・オート（半自動装填…1回引金を引くと1発発射される）射撃も可能だけど、僕は片手でショットガンを撃つ必要がある時以外は、僕は装弾不良が起こりにくいポンプ・アクションを使うようにしてるんだ。

滅多に起きないけど、殺し合いやってる真っ最中に銃がジャムって死んだ…なんてなったら、泣くに泣けないからね。

（不確定要素は、消すに限るよ…）

僕はそんな事を頭の片隅で考えながら…

「ちなみに僕はショットガンを蝶番だけじゃなく…」

銃上面にとりつけたマイクロ・レーザーサイトのスイッチを入れて、レーザー・ポインター（レーザーが当たった部分だけ発光する）ではなく見えやすいライン・レーザー（普通の可視光領域のレーザー光線）を選択。

そして、踞ったままの姿勢で驚いた顔で僕を見ているキンジの眉間に合わせる。

当然、レーザー光線はバレルと平行に照射されてる訳だから、M3Tの銃口もキンジのイケメン系顔面に向いてる訳で…

「普通に人の頭にめがけて撃つけどね」

” バガンッ！”

「きゃあっ!？」

後ろで白雪の悲鳴が上がるけど、気にしちゃいけない。

ザクロみたいに弾けたキンジの頭があるなら十字教式の祈りでも捧げるけど…生憎、飛び散ったのは無機物。

キンジの後ろにあったらしいミニコンポだ。

キンジは僕が引金を引く瞬間に横っ飛びして綺麗に受け身。

体に訓練で染み付いたの習性から、愛用のベレッタM92を引き抜き、僕に銃口を向けていた。

「て…テメェ! 明久っ!! いきなりなんてことしやがるっ!!」

少しやつれたし顔色もやや悪いけど、それでも元気に怒鳴りつけてくるキンジ…

”遠山キンジ”に、

「なにって…目覚ましだけど? どっかの腑抜けた誰かさんの目を覚まさせるには、号砲一発…いや”〇〇バックショット(九粒散弾の一種。鹿撃ち用散弾)”だから9発かな? ぐらいいるでしょ?」

「なっ…」

絶句するキンジに、

「だってそうじゃない？ 無責任なネットやマスゴミに少々叩かれたくらいで、膝を抱えて部屋の隅で踞まる？ 【リリカル☆なのは（無印）】のOPじゃあるまいし…そういう姿が似合うのは、僕好みのちっちゃくて可愛くて薄くて、凹凸や起伏の無いペッタンコな女の子の特権だよ」

白雪みたいにおっぱいが大きいと膝を抱える時に邪魔だろうし…

”ガタッ”

（んっ？）

部屋の外でなんか物音がしたなあ…

ついでに視界の片隅にピンク色の尻尾みたいなのが見えた気がしたけど、

（まあ、いいや…）

銃声が二発も響いたんだから、事情を知らない人間が見に来ても不思議じゃないし。

「…お前に、一体何が分かるんだよ…」

さっきの力強い怒鳴り声が嘘みたいに力無く呟くキンジだけど…

「分からないよ。最後の最後まで武偵として牙無き人を護り、戦って戦って最後に散ったお兄さんの名誉や誇りを守ろうともせず……」

僕はM3Tをバック・ホルスターに戻しながら、

「一人で悲劇の主人公気取って凹んでる奴の事なんて、さ」

「デメエ!!」

起き上がり様にベレッタを持ってない方の腕で殴りかかってくるキンジだったけど……

「遅いや」

僕は腕を内側から外側に円を描くように回し、キンジの拳を弾くように上に逸らす。

「ハッ！」

そして、強く一步踏み込んでガラ空きの胴体……鳩尾に、踏み込んだ時のエネルギー、八極拳で言う震脚だね♪を膝を通じて腰へ伝え、それに上半身の回転運動を相乗させて肘打ちに乗せて放った!

”ズンッ!”

「ぐふっ!?!」

膝から崩れ落ちて、胃から逆流した物を吐いた。

”あの事件”以来まともに食事してないのか、嘔吐したのは胃液ば

かりだったけど。

とある古式武術技の一つ

【半月破】

半月っていうのは肝臓を比喻した言い方なんだ。

本来は相手の腕を跳ね上げガラ空きの”脇腹”、無防備な肝臓に渾身の肘打を叩き込み、それを潰して絶命させる…本当の意味での必殺技だよ。

まあ、寸打や寸掌に並ぶ僕の徒手空拳打撃技の切札かな？

「キンジ…僕に前、自慢のお兄さんの事をよく話してくれたよね？
あれって嘘だったの？」

「な…なにを…」

まだダメージが残ってるせいで、絞り出すような声だ。

当然、立ち上がれそうも無いから、僕の方からキンジの前にドスンと胡座をかいて視線を合わせる。

「そうじゃん？ お兄さんが最後まで戦い抜いたって事実より、ネットやマスゴミの方が、キンジにとって重要なんでしょ？」

「そ、それは…」

あゝもう！

「キンジ、アイルランドの古い諺にこんながあるんだ。【泣くな。復讐しろ】」

「えっ！？ だけど、俺達は武偵で…」

「最後まで聞いてってば…それはこう続くんだよ。【最高の復讐と
は幸せになることだ】…ってね」

「明久…お前…」

「でも、今のまんまじゃ幸せになれない。キンジも…それに白雪も」
キンジは顔をあげ、ようやく白雪も居ることに気付いたみたいだ。

ホント鈍いよねえ…

（事が済んだら、少しお節介するかな？）

僕は立ち上がりながら、キンジに手を伸ばして…

「【武偵憲章第1条】は？」

キンジは、僕の手を強いグリップで握って、

「【仲間を信じ、仲間を助けよ】…か」

なんだ、しっかり覚えてるじゃん。

「キンジのお兄さんだって武偵なら、僕達の仲間じゃん？ だって
ら…」

僕はキンジを引っ張り立たせ、

「信じようよ？ 最後まで武偵であり続けたお兄さんをさ。助けようよ？ 汚されたお兄さんの名誉と誇りを…！」

「ああ…ああっ…！」

やれやれ。

ようやく死んだ目に光が戻ってきたみたいだね♪

（キンジは、こうでなくっちゃね…♪）

「だけど…具体的に、何をどうすればいいんだ…？」

「まあ、任せてよ♪ これでも頼りになる友人はそこそこのいるし…」

僕は、つい思い出し笑いをしながら、

「武偵高校ってホントにバカばっかだからさ♪」

一方その頃、学生寮の片隅では：

「な、な、な…！」

なんかピンク色の髪の毛のちんまいのが、顔を真っ赤にしながら小刻みに震えていて…

「わ、私ってもしかして…アイツのストライク・ゾーンのど真ん中っ…!!…!?」

何やら妙な事を口走っていた（笑）

更に遠距離射撃場では…

「レキ、いっつも何を聴いてるの?」

「ムツツリーニ商会謹製盗聴器…もとい。風の音」

「はぁ？ アンタ、今なんかおかしいこと…」

しかし、そのすこしクセツ毛のライム・グリーンの髪を短く揃えた小柄で平たい少女は無表情に、

「気のせい…もしくは禁則事項」

「あつ、そうなんだ…」

そして、周囲に人がいなくなった事を確認すると、相棒のドラグノフ半自動狙撃ライフルを丁寧にケースにしまい、自分の起伏のない胸をペタペタ…

やがて片手で小さくガッツ・ポーズして、

「…第一関門、突発」

何だか、カオスの予感がする武偵高校の昼下がりであった…

皆様、ご愛読ありがとうございますm〔m

暮灘が初めて書いた、【本格的なアリア】ネタは如何だったでしょうか？

何やら明久とキンジの友情物語っぽくなってしまいましたか…

ラストにアリアとレキが持っていたような？

ちなみに…

明久が強すぎるのでは？

←

理由があります。

S 研所属なのと深い関係があります。

明久がペッタンペッタンロリペッタン好き？

←

これも理由があります。

シリアスな意味皆無で怜と正反対な娘が好きみたいです（笑）

ま、まあ【バカ禁書】と違って他のバカテス・メンバーもチラチラ出てくるみたいですし、カオスは必至ですが…

もし、皆様のご要望があるなら、少し書いてみていいかなあ〜と思っています。

では、これからもよろしくお願いします（――）

皆様、こんばんわー☆

日付変更前ギリギリアップでホッとしてる暮灘です（＾＾；

いや、本当は明日アップのがより多くの人に読んで貰えるのはわかってはいるんですが…書き上げたらアップせずにはいられないという…

まあ、一種の病気ですね（＾＾；

読者の皆様的にはどうなのでしょう？

さて、今回は何というか…どっかで見覚えあるキャラが、一杯出てきます（笑）

よろしければ、バカテスとアリアのキャラや世界観のマッチングとかを皆様には是非ともお聞かせ願ひ、今後の作品にの参考にさせていただきますm（――）m

またしても深夜アップなので、どれだけの皆様が読んでくださるか不安ですが…お楽しみ頂ければ幸いです（o^ー'）b☆

部屋から【全身武器庫のような】明久が得意とする、火力を生かした力技：通称”火力技（笑）”で部屋から出てきた遠山キンジ：

明久と白雪に引っ張られるようにして学生寮の食堂に來たキンジを待っていたのは、

「やつほ☆ やあ〜つとアマテラスが天の岩戸からお出ましだねえ〜♪」

と、フリフリのゴスロリ風改造セーラー服にふわふわの金髪、ついでにちびっこできょぬーな少女が言えば、

「：あまり待たせるな俺も暇じゃない」

かたや白目がちな切れ長の鋭い瞳に、鷹の目を連想させる、小柄ながらいかにも俊敏そうな少年が言葉を繋ぐ。

「理子：土屋：お前ら」

「：明久には【商会】の方で色々借りがある。それだけだ」

土屋と呼ばれた少年に明久は呆れるように、

「毎度思うんだけど：僕の女装写真なんか商品価値あるの？」

「…バッチリ。”アシュラ（六武器or六銃使い）の明久”、”イグルー（武器庫）の明久”、”アンデッド（不死身）の明久”…お前の【戦績】^{スコア}にあやかりたいと【強襲科】^{アサルト}を中心に売上好調」

サムズ・アップする少年の言葉を受け継ぐように理子と呼ばれた少女は、「にひひ〜♪」と笑い、

「持つてるだけでご利益があるって評判だよ〜♪ 曰く”弾が当たらない”。曰く”体力or防御力が上がる”。曰く”死んでも一度だけ復活できる”ってね〜☆」

いや、まあ卒業までに3%は病院ではなく墓場送りになる【明日なき学科】の生徒達だけに、それだけ験^{げん}を担ぎたい気持ちもわからないが…

「僕の写真は、RPGのアイテムか何か？（汗）」

「似たようなものだ」

冷淡にすら感じる口調で言い切る土屋に、

「ポートレートが”^{アミューレット}護符”になるなんて、アキちゃんてば、まるで【幸運の女神様】だねえ〜♪」

明久は妙に楽しそうな黒髪少年と金髪少女にため息を突くと、

「康太、程々にね。理子ちゃん、お願いだからアキちゃんは止めて」

後ろで、女装と聞いた途端、キンジが「うう…兄さん…」と涙ぐみ

白雪に慰められてるが、明久は色々な意味で聞こえないようにしてるようだ。

「とにかく…土屋康太、今回の作戦に微力ながら助太刀する」

「同じく、峰理子ちゃん♪
【探偵科^{インクスタ}】1年最強カップルが、全力全開でサポートしちゃうよ〜ん☆」

「…カップル言うな」

「あ〜ん！ コータンってば、い〜つもつれないんだがらあ〜。でも、そういう冷たい言葉責めに理子、ゾクゾクしちゃう♪」

ギュ〜ツと康太の顔を胸の谷間に埋める”前乳固め（フロント・おっぱい・ホールド・F O F）”を極める理子。

しかし、康太は顔色一つ変えない。

どうやら、この世界の康太はかなりの【スケベ責め耐性】の持ち主で、鼻血とは無縁なようだ。

ある意味、チートである（笑）

しかし、見ている明久が何故かどんどん顔が青ざめていく。

「あれ？ あ〜くん、どうしたの？ 物凄く顔色悪いんだけど…？」

明久は理子の台詞に何でもないという風に首を横に振り、

「僕にも色々事情があるというか…その…」

その時、まるでタイミングを測るように、

「おっ？ 明久、遠山を引き釣り出す事に成功したみてえだな？」

「雄二！」

明久は嬉しそうに赤毛の大柄な少年…雄二に駆け寄り、

” カッン！ ”

と、親友同士の挨拶で、軽く拳を合わせる。

「雄二こそ上手く動員してくれたみたいだね？」

雄二が率いてきた一団を見ながら明久が感心を隠さずに言うのと、

「あたばーよ！ ” 尋問科 ” のエース、坂本雄二様をナメんじやねーぞ？」

雄二はウィンクするが、

「と、言いたいところだが、今回はあんまし” 交渉術の余地は無かったな。お前の名前出して作戦内容話したら、大体一発OKだったぜ？ 翔子は勘定に入らねえだろうし」

「うん。雄二とはいつでも一緒」

まるで呼応するように声が聞こえたのは、明久と拳をぶつけた右腕とは反対側の左腕の方から、厳密に言うなら雄二の左腕に胸を押し

付けるように抱き付く、美少女しか入れない特殊捜査研究科（CVR・C研）にいてもおかしくない、日本人形を思わせる長い黒髪の美しい少女だった。

「1年”インフォルマ情報科”、霧島翔子。雄二が明久に力を貸すなら、私も全面協力を約束する」

明久はニツコリ微笑み、

「翔子ちゃんもありがとう♪」

「いい。理由はさっき言った事が全てだから、お礼はいらない」

しかし、雄二は苦笑しながら、

「いいから礼ぐらい受け取っておけ。なんせ、デートがおじゃんなっちまったんだからな」

「えっ!？ ああ…ごめんね?」

「明久が謝る必要はない。雄二の判断は当然だと思う。デートはいつでも出来るけど、仲間を助けるのは今しかできないから…それに、」

翔子は腕に抱きついたまま雄二の顔を見上げてたおやかな微笑みと共に…

「雄二と一緒に居られれば、それだけで私は幸せだから…」

「翔子…」

そして、見つめ合う恋人同士…

「だから、雄二…ずっと一緒に居て…」

雄二は不意にギュッと翔子の華奢な肢からだ体を抱き締め、

「当たり前だろ？ 死が二人を分かつ時まで、ずっと一緒だ…」

「嬉しい…」

自然に重なる唇と唇…

甘い甘いスイート・キス…

今の二人には、

『赤ゴリラ…殺す!』

『今すぐ赤毛を射撃の的にしてえ…!!!』

『リア充、比喻でなく爆発させたらか…?』

という周囲の【彼女いない歴〓年齢】のヤローどもの怨嗟の声なんて聞こえる筈もなく、また白雪を筆頭に一部の女子が実に羨ましそうにガン見してた事など、どうでも良い事だった。

(雄二も翔子ちゃんも相変わらずだなあ…と)

なんて明久が考えてると…

「アキ坊!」

明久にとって小さい頃からえらく聞き覚えがある凜とした声が響いて、

「優子さん♪」

雄二の時とは違う意味で嬉しい顔をする明久に、茶色の髪をショートに切り揃え、エメラルド色の瞳が凛々しく輝く少女は、

「何か用がある時は、レッド・マウンテン・ゴリラなんて珍獣使いに超越さず、直接来なさい！」

「ヲイ…！」

分厚い胸板に頬擦りしてる幸せそうな翔子を抱き締めながら何か言いたげな雄二を軽くスルーする優子という名の少女。

「ご、ごめん。優子さん…」

途端に姉に怒られた時の弟のように心持ち小さくなる明久に、優子はクスリと微笑むと耳元に唇を寄せて、

「困った事があったら、いつでも”お姉ちゃん”に相談なさいって言ってるでしょ？」

と、慈愛に溢れた優しい瞳で囁いた。

「うん♪」

その答えに満足したのか優子は明久から離れると襟元を正し、

「話は、その赤毛拷問ゴリラから聞いたわ：1年”通信科”、木下優子！ 可愛い弟分の為、一肌脱いであげようじゃないっ！！」

誤解ないように言うておくが、優子は決して雄二を嫌ってはいない。

ただ…たまに呆れ、頭痛を感じるだけだ。

続々と…続々と仲間が集結し始めた。

確かに、明久や雄二の人望は決して無視できない。
だが、それだけではこうまで人材は集まらないだろう。

【仲間を信じ、仲間を助けよ】

いつ果てるか分からない武偵だからこそ、横の繋がりと団結が強く、
またその言葉の意味は重かった：

食堂は今にもミーティングが始められそうな気配…適度な緊張感に満たされつつあった…

そして…

二人の【ある意味、本命の少女】は、すぐそこまで来ていたっ!!

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It;パイロット版:E p i s o d e 0 0 & g f

皆様、ご愛読ありがとうございましたm (m

武偵高校にちゆかり在籍していたバカテス・キャラクターズや、取り分けキャラ改变やカップリングは如何でしょうか？（^^；

正直、アリアは勝手が分からないので試行錯誤しながら書いてるの
で、自分では面白いのか面白くないのかよくわからなくて（；^
^ A

是非、皆様のご意見ご感想をお聞かせください (

では、また次回があることを期待しつつ（o^ー'）b☆

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It;パイロット版：Episode 00&g

皆様、こんばんわー☆

本日二度目のお邪魔な暮灘です（＾＾；

今回の【バカテス×緋弾】ちょっと実験的に、【三人の視点を三人称で、しかも別々の時間軸で語る】という手法を使いました（＾＾；）

この書き方だと【確定未来】になるという制限があるんですが、それはこの作品がパイロット版：【無数にある未来の選択肢の一つ】と考えて頂ければ（；＾＾A

85

まあ、でもこの【バカリア】の明久が、”体力と若さに任せた”ら、普通にシてても一人だと”壊され”そうなんで、何人かに分散させた方がいかなって♪とか思ってます（笑）

まあ、明久は今回のエピソードにその片鱗が出てきますが、【覚醒ブラドに匹敵する”化物”】の可能性も否定できないし（汗）

そして、今回の目玉は…

【ロボット・レキ】ならぬ…

【忠犬レキ】

ですっ!! (o^ー,) b☆
いやゝ、書いてて可愛い可愛い♪

深夜アップ故、どれ程の読者様に読んで頂けるか不安ですが、楽しんで頂ければ幸いです (o^ー,) b☆

武偵高校学生寮、食堂

集まる生徒達の熱気：

彼らは：

彼女らは：

どうしてここに集まったのか？

”武偵”ではないが、既に”武人”としては：【不正規戦のエキスパート】としては名を馳せていた”吉井明久”の呼びかけだからか？

それとも、赤ゴリラ：もとい。”赤毛の扇動者”の異名を持つ坂本雄二にそそのかされたからか？

断じて否！

全ては殉職した武偵にして遠山キンジの兄、”遠山金一”の名誉を守り、踏みにじられた武偵の誇りを取り戻す為の戦いに参加する為：

武偵憲章第一条

【仲間を信じ、仲間を助けよ】

それこそが、正義や悪というあやふやな物を越え、彼らが彼女らが遵守すべき物の全てだった…

既にミーティングは始まろうとしていた。

しかし、まるで自分達こそ真打ちだと言いたげに、二つある別々の入口から二人の少女が唐突に姿を現す。

対称的なヘアースタイルと色の髪 of 少女二人はほぼ同時に、

「強襲要員に空きはあるわよねっ!？」

「狙撃手に志願します」

と、告げた。

自分以外に同時に発せられた声に、二人は顔を見合わせる。

互いにあまり人付き合いが下手なせい、技量が圧倒的過ぎるせいか、あるいはその両方か…

良く言って”孤高”という評判が付きまとう二人の少女は…

「えっ…? レキ、アンタって自分から売り込みすること、あるん

だ？」

「アリア：他人の騒ぎに首を突っ込むなんて珍しい」

と、互いの【彼女には友達いない（”少ない”ではない…）】的な評価を全肯定するような見解を述べた。

しかし、どう反応していいのか困ったのが、食堂に集まった武偵の卵達だ。

なんせ、【絶対にコイツらは参加しないだろう】ランキングの堂々1位と2位が雁首揃えてお出ましとくれば、驚かない方がどうかしてる。

しかし、それに全く動じてない者が約一名…

「心配しなくても、空席は山ほどあるよ♪ 人手はどれ程いても困らないしね。熱烈歓迎だよ、お二人さん☆」

と、アリアとレキにウインクする明久。

いい度胸をしてると言うか…いや、明久だけにこの二人が誰なのか分かってないのかもしれないが…

とにかく、これが…

吉井明久と彼を生涯に渡り支え続けた少女達…

”神崎・H・アリア”と”レキ”との初めての出会いだった。

少し時間を遡ろう。

ここに【神崎・H・アリア】ホームズという少女がいる。

”原作”と呼ばれる平行世界であるなら、彼女は【1年の3学期】に武偵高校に転校してくる筈の彼女だったが、”この世界の彼女”は受ける予定の仕事がキャンセルとなった為に【1年の2学期半ば】に転校してきていた。

だからこそ、平行世界ではニアミスしただけの

【浦賀沖海難事故】

にこうして関われるのだった。

かといって、アリアが東京武偵高校に転校してきた理由が変わる訳

ではなかった。

”平行世界”を知る読者の皆様ならご存知の通り、彼女の直接的な目的はあくまで【パートナー探し】であり、最終的には【冤罪を着せられた母親の無実を証明する】事だ。

ならば、彼女が入学して最初に【マスタース教務科】に行き、自分と一番相性のいい…言い方を変えれば、《背中を預けられる》相手を探す為に【アサルト強襲科】さほど不自然な話ではない。

生徒達の資料の中で最初に目を付けたのは、【遠山キンジ】という一人の生徒だった。

入学の時に【Sランク】のスコアを叩き出したが、それ以降は何故かパツとした成績を残していない不思議な生徒だった。

ちなみに、武偵ランクは通常A～Eまで分類され、更にAの上に”スペシャルズ or スペシャリスト”を意味する特別枠の【Sランク】があり、その上に世界に数名しかいない【ロイヤルRランク】が存在している。

だが、資料を漁る内にエリアは不思議な事に気が付いた。

武偵ランクではなく、【純戦闘力評定表】という内部資料がある。

これは名前の通り戦闘力のみを抽出したデータだが…

その中に特異な名があったのだ。

キンジのように入学試験の一度きりではなく、常に【1年最強の戦闘力】と評価される少年の名があった：

いや、それどころか：

「ちよっ！？…入試で【エネミー（仮想敵）】役のマスター（教官）
三人を、たった一人で【救護科】アンビュランス送りにした…ですってえゝっ！？」
そう、その洒落にならない戦闘力を叩き出した少年の名こそ、

【吉井明久】

だった…

「…”ご主人様”の事を語るの？」

全ての物語が終わってから数年後：

レキは、愛しそうに明久との絆：彼女の名前が彫られた銀のネームプレートが下げられた”首輪”を撫でながら、

「最初、ご主人様にあった時、直感でレキと同じ人種だと思った：勘違いだったけど」

レキは顔を赤らめ、そして幸せそうに、

「レキはご主人様の【飼^{ペット}い犬】だから、”人種”は変」

レキの話は少々纏まりが悪い：

というか、自分がどれだけ”ご主人様”に愛されているのか、あるいは自分がいかに”忠犬”なのかが、内容の90%を占める：

ぶっちゃけ、砂糖吐きそうノロケ話（甘々の調教シーン付）ばかりなので、当方でまとめさせてもらう。

というか、自分から：

「おねだりして”犬”にして貰った。人間は裏切るけど、犬は【真あるじの主人】と認めれば裏切らない。絶対服従が基本」

いや、そこで無表情でサムズ・アップされても：

というノリである。

とにかく、レキの話を纏めると、レキが初めて明久に興味を惹かれたのは、1年最初の【実戦演習】だったらしい。

入試で負傷し、武偵病院送りされた教官に代わり、【超能力捜査研究科（RSS…通称”S研”） からフラリとエネミー（仮想敵）役としてやってきた小柄で穏和そうな、どこか女性的な顔立ちの少年…

そして、その自分達と同じ1年生だという少年が扮する【たった一人の凶悪なテロリスト】の前に…

「1年の【強襲科^{アサルト}】と【狙撃科^{スナイプ}】を合わせた《強襲学部》は全滅した。勿論、レキも含めて」

そう…

その少年の名こそ、【吉井明久】だった。

【吉井明久】とは、何者なのか…？

何故、そのような”異常な戦闘力”を持っているのか？

もし、この物語が続くのなら…
その謎は、いつか明らかにされるのかもしれない…

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It;パイロット版：Episode00&g

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

短いですが、何とか二本目をアップできてホッとしてる暮灘です（
^ ^；

皆様、【わんこなレキ】は如何だったでしょうか？（笑）

って、しよっぱなからそれかいっ！
と、セルフツッコミしたりして（^|^；）

連載を続けるなら、アリアと今回は美味しいところ持っていたレキをしばらく明久の”ツイン・ヒロイン”にしようかな〜と思ってます。

うゝん：どんな形であれ、【Episode00】は書き終えたいけど、その先はどうしようかなあ〜と（；^|^A

取り敢えず、いつ投稿とはお約束できませんが、次回があります…
多分ですが（汗）

では、またお会いできる事を祈りつつ〔

【バカとアリアと賞金稼ぎ】&It;パイロット版:E p i s o d e 0 0 & g f

皆様、おはようございまーす☆

昨日は二ヶ月振りに声を聞く親友と長電話してしまい、疲れて寝落ちしてしまった暮灘です（^^；

またしても変化球アップです（；^|^A

というか、最近は回る動画にかなりムラがあって（泣）

泣き言はこれぐらいにして、今回のエピソードは…

【浦賀沖海難事故】の本格的な”報復”のスタートです（o^_^、）
b ☆

あえて裏設定を書きますが、その【本質的な理由】は後々でできますが、明久は冗談みたいに高い戦闘力の割には、とても”武偵ランク”は低いんです。

今回は、その理由の一端が分かるエピソードかもしれません（^^；

あと、緋弾キヤラは勿論のこと、【武偵高校にいるバカテス・キヤ

ラ達】に”らしさ”が出てればいいなあと（＾|＾；）

とりあえず、そんな感じのエピソードですが楽しんで戴ければ幸いです（o^ー’）b☆

武偵高校学生寮食堂（臨時ミーティング・ルーム）

「康太、理子ちゃん…クルージング会社で武偵に泥を塗った”首謀者”達の絞り込みは？」

明久の問い掛けに、

「バッチリだよろ〜ん☆」

「…今から動画ファイルと音声ファイル、並びに【冤罪】を作り上げる為の内部資料の文章ファイルを全員の端末に送信する…」

それは、まさに悪巧みの【証拠】であった。

正直、この動画ファイルをネットに公開するだけで十分な”反響”は得られるだろう。

実際にそう囁く生徒もいた。
しかし…

「康太、理子ちゃん。ぐっじょぶ☆」

いい笑顔でサムズ・アップする明久に、

「お誉めの言葉、だうも♪」

と、ウインクで返す理子に、

「フン…当然だ」

小さく鼻を鳴らす康太。

「”呼び水”には、これで十分だよ♪」

明久がそう言うと、アリアは不思議そうな顔で、

「”呼び水”？」

「アリア、今回の任務の目的は何だと思う？ 推理してごらんよ」

「ぐっ…」

思わず言葉につまるアリア。

実はこのちっこくて薄っぺらくて平たいピンク色のロング・ツインテ少女は、現場でドンパチやら捕り物やるのは大得意だが、一族の皆のようにオフィスで幾百幾千、あるいは数万の可能性の中から【たった一つの正解】を探り出すような頭脳労働を大の苦手としていた。

どのぐらい苦手かというと：世界中にある”推理”という単語全てに、愛用のブラック&シルバーのキンバー社謹製クローン・ガバの2丁拳銃で風穴どころか蜂の巣にしたくなる程だ。

しかし明久は、何もアリアだけに聞いた訳ではないらしく、いつの間にか持ち込まれたホワイトボードに、

(1)

《遠山金一の汚名返上と名誉回復》

と書いた後に、

「でも、それじゃあ足りない…」

そう呟いてこう書き足した。

(2)

《同様の手口による武偵への冤罪（罪の擦り付け）を抑止する為のケース・デモンストレーション》

と…

「いい？　まず、キンジのお兄さんの汚名を返上と名誉回復は、作戦【第一優先事項（1stプライオリティ）】だ」

そして、明久は全員を見回し、

「そして、2ndプライオリティは…【類似の手口を未然に抑止すること】だよ」

そして明久の目付きが異常に鋭くなる。

普通の勉強は大の苦手、偏差値最悪の武偵高校の一般教科でも赤点スレスレの低空飛行をくりかえしてるが、それは即ち頭の回転が鈍いという意味ではない。

いや、むしろ時折人間離れした思考速度を見せる事すらあった。

「全員に心して聞いて欲しいんだけど…【浦賀沖海難事故】は、このまま放置すれば、必ず【ロクでもない】前例になる」

そして言葉を選択しながら、

「簡単に言えば、【何か問題が起きた時に武偵がいれば、それに罪を擦り付ければいい】って前例さ。そして、このケースは確実に更にまずい方向へ向かう」

「まずい…方向？」

明久がホワイトボードに書いた【罪を擦り付ける】という単語を見てから、アリアは少し顔色悪く、動揺してるように見えた。

「【問題が起こりそうな事態に意図的に武偵を雇い、問題が起きた

時に武偵に罪を擦り付ける】。あるいは…」

明久は一呼吸置いて、

「【最初からスケープゴートとして武偵を雇う】」

”ざわっ…!!”

一瞬、食堂が一斉にざわめいた。

「有り得ない…とは言わないで欲しいな？ 人間なんて汚いもんだよ。金の為なら法律なんてクソクラエと思ってる連中がゴマンというから、僕達みたいな【武偵】なんて商売が成り立つんだしさ」

すると坂本雄二は立ち上がり、

「なあ、みんな…明久は一人の武偵の名誉を守るってだけじゃねえ。将来的に武偵全員にふりかかるかもしれねえリスクを、未然に潰そうって言ってるんだ…」

雄二は全員を見ながら張りのある男らしい声で、

「ここは全員で全力で手を貸してやろうじゃねえか!!」

「」「」「オオオッーッ!!!」「」「」

全員が雄二の呼び声に応える！！

武偵憲章第一条【仲間を信じ、仲間を助けよ】

ここに、【今回の作戦】における具体的な共通コンセンサスが生まれたのだった！！

坂本雄二…

例えば世界が違っていても、その【煽動】アシテートテクニックは健在らしい。

《ありがとう。雄二》

《いいってこった》

目線で会話する二人の親友、その堅い絆に少し拗ねる翔子の肩を抱き寄せ、そっと唇を重ねる雄二…

顔をほんのり赤くした翔子は一気に上機嫌だ。

ちなみに度重なる雄二の【愛情表現】に、翔子の下着の中は水溜まりでもできそうな感じで、一部は溢れて太ももの内側を伝い初めてるが、いつもの事なので翔子は放置する事にしてる。

というより体液が染み込みまくったヌレヌレ&スケスケのぱんつの方が雄二が喜ぶ事を、翔子はよく知っていた。

だから、今夜脱がされるまでこのまま履き替えないでおこうとも…

金持ちお嬢様なのに、翔子の下着がどれもこれも妙に染み汚れが多いのは、この辺りが理由だろう。

ちなみに雄二は、翔子限定だが黄色や茶色の染みも大好きだったりする。

勿論、翔子は翔子で選択前の雄二の下着をくすねて、彼が不在の寂しい時にはクンカクンカしながらハアハアしてるのでおあいこだろう。

それはさておき、明久の話は具体的な振り分けに入っていた。

「康太と理子ちゃん達【探偵科^{インケスタ}】はリストアップした人物の発信機や盗聴器を使った尾行と監視を継続。そして、可能ならクルージング会社の【全員の社員名簿】と【別件での犯罪資料】を入手してくれる?」

「あいあいさー☆」

「具体的には? 少しの絞りたい」

能天氣に返してくる理子とプロの目付きになる康太。

「訴訟を恐れて武偵に罪を擦り付けるような体質の経営陣が支配する会社だ: 脱税に使途不明金、裏金作りに政治家への違法献金に暴力団へのマナー・ロンドリングなんかの横流し: 二重帳簿に裏帳簿。そっちの方面で叩けば出てくる埃は山ほどある筈だよ?」

「: 了解」

「翔子ちゃん達【情報科^{インフォルマ}】は、探偵科が持ってくる情報の解析と裁判で勝訴できる程の証拠固めをお願い」

「了解」

雄二の腕を胸の谷間に挟むようにして答える翔子。

「優子さん達【通信科^{コネクト}】は、公共放送とネット上でネガキャン（叩

き) やって明らかに世論を煽動してるクルージング会社の社員と【クルージング会社から金を貰って叩いてる”お抱えコメンテーター”】の特定をお願いしていい?」

「任せなさい」

と、姉らしく力強く頷く優子。

「優子さんがリストアップした人員を情報科、探偵科、諜報科^{レザド}共同で情報を徹底的に洗い出して欲しいんだ。そのデータを元に…」

明久は小さく薄く笑い、

「僕達【強襲科^{アサルト}】が、”実働”で動く。【狙撃科^{スナイプ}】はバックアップをお願いしたいんだけど」

「わかった」

「了解よ!」

レキとアリアはそう頷くが、

「あれ? ”実働”って何をやるの?」

そう聞くアリアに明久はサラリと、

「【最重要容疑者】…ぶっちゃけ【今回の首謀者】の”確保”さ」

「えっ?...えゝっ!?!」

その意味を理解した途端、エリアはフリーズする。
しかし、明久はそれを軽くスルーし、

「雄二、^{ダギユラ}【尋問科】は僕達が確保した容疑者の尋問をお願い。方法は任せるよ」

「あいよ。まあ…」

雄二はニヤリツと笑い、

「俺が【ダギユラのエース】って呼ばれる所以^{ゆえん}、見せてやろうじゃないの…！」

「…勢い余って殺さないでね？」

明久の言葉に雄二は楽しげな表情で、

「”尋問”で殺しちゃうのは、素人のやること。俺達玄人は、対象に【死んだ方がマシな状態】と思わせるのが仕事だぜ？」

その瞬間、雄二の事を知る全員が思ったという。

（（（（（やっぱ、真性サディストの【拷問赤ゴリラ】って二つ名、ガチだったんだ…）））））

「ちょ、ちょっと待ちなさいよっ!!」

一通りの作戦説明が終わった時、そう切り出したのは、やはりアリアだ。

「それってもしかして、【民間人の誘拐】なんじゃ…」

「? そうだけど? それがどうかしたの?」

事も無げに言い返す明久に、

「法を守る武偵が…」

「神崎さん、だっけ? 目的と手段は一致させねばならない…それは分かるね?」

アリアが怪訝な表情をしながらも頷くのを待ってから、

「【悪党相手には、イカサマも手札の内】なんだよ♪」

「…どういう意味よ？」

「武偵憲章第一条【仲間を信じ、仲間を助けよ】…」

明久は真っ直ぐにアリアを見ると、

「法を守るより、僕は殉職した仲間の名誉と、余計なリスクを潰して”仲間の未来”を助きたい」

明久は小さく、

「ただ、それだけだよ」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

明久の意外(?)なリーダーシップは如何だったでしょうか?

書き終えた後に気付いたんですが:

「キンジの台詞が一つもねえーっ!?!」

いや、まあキャラが多い作品にはありがちって事でお許しを(ゝゝゝ)

ちなみに暮灘名物(笑)のエ○表現が途中で入ってるのは、シリアス一辺倒で書きたくないなあと(ゝゝゝ)

さてさて、本格的にストーリーが動き始めた今回ですが、果たして次回はどうなることやら(ゝゝゝA

アップ時期は断言できませんが、また次回も読者の皆様にお付き合い戴ければ幸いです(〇ゝゝ)b☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973y/>

吉井明久を様々な世界の色々なヒロインと絡ませてみた

2011年11月18日21時15分発行